
有り得ない世界にわたし

kiro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有り得ない世界にわたし

【Nコード】

N9203Z

【作者名】

kiir o

【あらすじ】

知らないけど、マフィアの娘に。

とりあえず、一生懸命に生きる事を目標に毎日を過ごす。

なぜ、どうして異世界に来たのかはわからないけど

、幸せに成るために頑張ってるうちに色々勘違いされて、話が大きくなってきた話。

お嬢様について その1（前書き）

色々不慣れで間違いもいっぱいでしょうが、許してください。

沢山、言いたい事いっぱいでも、優しく見守ってください。

完走出来るようがんばります。

お嬢様について その1

とりあえず、今日も地道に地味にいきる事を目標に頑張ろう！

自室のベッドの上で決意表明をしていた。

この世界に生きる事になってからの習慣。

「お嬢様、朝食の準備が整いました」

柊。

彼は、わたしの従者。

わたしの面倒を幼き頃から見てもらっています。

きっと、嫌がられてはいないと思いたい。

「ありがとうございます。」

高そうなカップにお湯を注ぎ込みながら、彼はニコリと口元を上げた。

「本日は、ファミリーの皆様方ご集合の御命令が、お嬢様もと旦那様がおっしゃっております。」

「そう、わかりました。参ります。」

わたしはそう答えながら、面の厚くなった顔を笑顔に変えた。

何が起こっても驚くなんて顔は、表に出さないでいられる自信がある。だって、それくらいしか私には武器がない。

こんな変な世界に対応出来るわけない!?

ない!?

だって、だって、だって、

マフィアのドンの娘って何!!!

お嬢様について その1（後書き）

完走出来るようにがんばります。
よろしくお願ひします！

お嬢様について その2

私が初めて従者としてお勤めする事になったのは、12歳。
父に連れられ、バレルファミリーの本部にやってきた。今から15
年前だ。

バレル島を本部としている為、そう言われているバレルファミリー
は、この世界で5本の指に入る大きなマフィアだ。

バレルファミリーのドンには、3人の娘がいる。

長女、イノリさま。

二女、ミノアさま。

三女、ヒノエさま。

3人のうち、末のヒノエさまは、奥様が違う方からお生まれになっ
ている。

わたしは、三女ヒノエさまの従者として推挙された。お嬢様、当時
2歳。

ヒノエさまの従者になるに辺り、マフィアとして力のあるもので、
年も近きものではなくてはならないと強く、ドンとドンナに言われ
た。

父は、ドンの幹部を務めていた。

2歳と12歳。

近くはないと思うが、私が従者になった。

ドンの奥様は、金髪波うつ背の高い美人だ。

ヒノエさまは、黒髪で黒眼。腰程にある髪は、艶やかであるが、真つすぐ伸びている。

背も190センチほどある私から見るとかなり低い。

先日、145センチほどであると、専属の医師が言っていた。

当然、3人のうちでも一番低い。

イノリさまは、171センチ。

ミノアさまは、177センチ。

可愛らしいお顔に小さい背。

御本人は気にしているらしく、お食事は何時も魚をメインにし、ミルクをお飲みになる。

マフィアの娘だが、好戦的で派手な上の2人に対し、温和しめな方だ。慈悲深い方であり、血生臭い事を嫌うため、マフィアの役目は少々酷ではないかと思った。

14年前

「ひーらぎ、おじちゃん倒れてる。たしゅけて。」

侵入した賊をみてそうお嬢様はおっしやって、慌てて私の方に向かって走って来た。

そいつは、今お嬢様の運転手兼護衛をしている渡だ。

11年前

「柎、倒れてた。どうしよう。」

雨の日、雨具を羽織っていたお嬢様は、一生懸命走って来て私を呼んだ。

それらは、現在お嬢様のペット兼友人となっている、フォボスにデイモスだ。
因みに鷹である。

お嬢様は、マフィアのボスの娘である。

お嬢様について その3

あの日は、月の光の入らない日だった。

ワシが、このバレルファミリーの仲間入りしてから、かれこれ14年経過していた。

食うものに困り、訳の分からない奴等にファミリーに侵入して来いと言われたことがきっかけだった。

とりあえず、食べ物にはありつけたが、困ったワシは、敷地内で力尽きた。

死ぬのもイイと思った。そうすれば、すべてが終わると思ったからだ。

妻や息子は、事故でなくし目標を失っていたワシには丁度よかったのだ。

目を覚ますと、小さな手が見えた。

「だいじょーぶ、おじちゃん」

黒髪、黒眼の幼子だ。

「ああ」

「よかった」

「だれだ、おまえっ…痛っ」

「お嬢様です。そのような口は慎んで頂けますか」

幼子の後ろに控えていた、黒服の子供？はそう言ってワシを殴ったのだ。

その時、はじめて綺麗なベッドに寝かされていることを悟った。

「おじちゃん、行くとこないの？」

「行くとこ？？」

「うん、ひいらぎがいった。」

「えっ、ああ、気にするな、お嬢様」

「えっとね、じああね、こいで働けば」

「は？」「ええ？？」

「そつだ、今日からわたりね、名前はわたり。」

「渡、おはよう」

あの頃より少し成長したヒノエお嬢様が車の前に顔出した。

「おはようございます。今日はどちらへ」

扉を開けて車の中に乗車させる。

「渡。何でも皆集合なんだって…、わたし行ってどうするんだろうねえ…はぁあ」

「そつでございますね…」

「渡!」

「はい、はい、そつだなあ…、ワシにもわからん。まあ、行ってから考えたらどうじゃ」

「ううう…、そつするしかないんだね」

「ハハハハハハ」

雇われることになってから、力のあるマフィアの末娘だと知った。護衛をするに辺り、かなり身体を鍛えなおされた事が一番しんどか

った。

ヒノエお嬢さんはワシのことを気に行つたのかよく様子を見に来ていた建前気は抜けんかった。

面白いお嬢さんで、ワシに名前を付け、新しい家族の一員とした。名づけるとは、マフィアの世界では、そういうことを意味するらしい。

一度無くしたものだつた命、それもよかろうと感じた。

あれから14年、身長はあまり伸びんかったお嬢様は、ワシより20センチも低く、未だ子供のような容顔だ。よい家柄の娘としても少し変わっているが、よき娘に育つた。

ワシも年をとつたということか…。

「渡は、イケメンだよね、だから!!」

ヒノエお嬢さんになぜワシを助けたか聞いた時、そういつた。

キラキラした顔だったので聞けんかったが、一体あれはなんだつたのか未だわからん。

ただ何か、大きな期待が含まれていたのは事実のようだったが…。

期待してくれているのだから、答えねばならんかと結論付けた。

(イケメンなら、いつれダンディーになるかもしれないし、見てみたいじゃん)

(彫の深いイタリア系ダンディズム)

「いい感じだよねえ、わたし凄い」

「お嬢さん？」

「ううん、一人言」

ヒノエお嬢さんは、マフィアの末娘だ。

お嬢様について その4

私は、なぜこんなところでお嬢様をしているか？
まだ、小さいころは今より真剣に考えていた。

（赤子って話せないのが、玉に傷だわ）
うつ伏せに、寝っ転がっていた私は、だだっ広い部屋にぽつんと
していた。

（この状況、どう見ても何か事情がある赤子なんだわ）
立ち上がろうと試みるも失敗。

（1日に何度か訪れるメイドも色々だし、第一なんで私こんな赤子
になってんの）

2000年代の日本のOLとして日々、仕事という荒波と格闘中だ
った、わたし。

ワーキングプアもいとこだった。
とりあえず、正社員にならなくてはと必死だ。

仕事中、課の上司に何か言われてる内にフェードアウト。
気付いたら、ここにおいて、赤子だった。

「失礼いたします」

「ああ〜」(なに〜)

「奥様、こちらでございます」

「ああ〜?」(えっ)

「この赤子が、ドンが外で作ったという娘ですか」

「はい。直属の部下よりそう聞いております。東の国へ滞在中、遊郭という場所の遊び女が集う宿でまだお付きとして仕事をしていた女との間に出来たと聞いています。この赤子を産んですぐ亡くなつたそうです。不思議な女性だったとおっしゃっております」

(えーっ 修羅場…)

「…そう、あの男の子に間違いはないならよい。この赤子も育てよとのご命令です」

「ですが、奥様」

「そのようなことは、どうでもいいのです。わたくしが勤めを果たせば自由になれるはず、わたくしの勤めは、子を産み、ある程度まで育てる。それだけです。」

赤子ながらに、壮絶な家庭環境であることは理解した。
(まさか、マフィアだとは、思わなかったけど…)

その後、ドンとやらに会ったのは、奥様がやってきてから8日後のことだった。

「ヒノエ」

昼寝中起こされたわたしは不機嫌だった。

「うきゃーう」(なんだよ、眠いんだ)

「以前より重くなったか？」

「なー」(だれ、あんた)

「お前は、母である藤によく似ている。不思議と落ち着く女だったが、変な力のせいであまり身体は丈夫ではなかったな。お前にも受け継がれているのか…」

「はあううああ」(何、ソレ！)

「大きくなれ」

そう言って静かにこの部屋を後にした。

(どうでもいいけど、なんか彫深くてちょっと凄みのあるイケメンだった…、ここって全員イケメン仕様なのかな?)

その考えは、2日後部下とやらがやってきた時に間違っていたことを悟ることになる。

わたしは、イケてる感じのドンの娘だった。

お嬢様について その5

15年前

「カイル、お前は今日から柊と名乗れ」

「はい」

私は、父にドンの別宅へ向かう途中そのように指示された。

父は、幹部の中でも7武神の中の一人だ。

バレルファミリは、ドンを中心に7武神がいた。

金の管理をする部署

島の警備を担当する部署

船の警備を担当する部署

武器を管理する部署

暗殺を担当する部署

外交を担当する部署

内部の監査を担当する部署

以上に分かれているすべてのトップのことを指す。

内部の監査を担当する部署のトップに立っていたのが父だ。

バーン・アウデイト。

不器用な父だったが、仕事での信は厚い人だ。

「お前は、ドンの末娘ヒノエ様の従者だ。わたしの息子では無くなる。よいな、励め」

「はい」

「失礼いたします」

そう言って入ってきたおっさんは馬鹿でっかくて、ついでに恐ろしかった。顔が。

「ヒノエお嬢様だ。柊」

「……、柊です。よろしくお願いいたします」

「あー」（よろしくー）

次に入ってきた少年は、美形だった。

青い眼に茶髪。

身長およそ165センチ

隣の爺ついおっさんは、2メートルを超えていそうな身長だ。顔が怖いを足して、2重苦。

（恐ろしい。この世界はイケメン仕様じゃなかったのか）

案内された別宅の最奥、そこがお嬢様の聖域でした。扉を開けて眼に入ったのは、小さな赤子だった。標準よりも小さい赤子で驚いたことを覚えている。抱いた時、大きく零れそうな黒眼でじいーとこちらを見つめていた。泣く訳でもなく、ただ見つめられていた。最初、赤子と抵抗があったが、すぐに吹き飛ばされ可愛さに負けたのだ。

(近くで見ると、ますます美形だ)

「お嬢様、あーん」
「お嬢様、オムツ変えましょうね」
「お嬢様、ねんねの時間です」
「お嬢様、…」

「はぁ…」 (甘かった)

その後、どうでもいい羞恥心と戦うことになるとは、あの時ちっとも考えていなかった。
最悪だ。

私は、お嬢様が可愛くて仕方なかった。

私は、ドンの娘として羞恥心と戦った。

お嬢様について その6

11年前

フォボスとデイモスに会ったのは、雨の日の庭だった。

日本だったら、わたしは小学生入学を迎えていた頃だ。

「ぴちぴち、ちゃぷちゃぷ らんらんらん」

「お嬢、屋敷に戻りましょう」

「やだ」

「お嬢、柊に怒られるの、ワシなんですよ」

「やだ」

渡は、護衛の為どこまでもついて来る。

丁度、それにイラついていた頃の話だ。

まあ、この屋敷には柊、渡、私の3人のみしか存在しない。

柊は、メイドを追い出してしまったから、家のことで忙しい。

まるで、執事のごとく働いているし、もっぱら屋敷内は渡と行動した。

護衛なんて意味なしと思っていた。

「あつ、かたつもり！」

「いいえ、お嬢、かたつむりです」

「むゝ、間違えた」

「ハハハ」

「笑った、渡！！」

「ハイハイ、帰りますよ」

「わた…っ」

「覚悟！！！！」

わたしは、その後泥濘にはまって転んでしまっただけで見えなかった。

「お嬢！！！」

見えたのは、赤い血が水溜まりに流れて雨に色をつけていたこと位だ。

それから、大きな音が聞こえたことだ。耳がぐわんぐわんしていた。

どこかで鳥の鳴き声のようなものが響いた。

「お嬢、振り向くな！！！」

「う、うん」

「大丈夫か」

「ごめんちゃい……」

「いいや、お嬢は悪く……」

「ううん、鳥さん死んじゃった」

「いや、お嬢、死んだのは鳥じゃなくて刺客なんだが……」

渡に抱きあげられながら、私は1メートル程先の木の下を指差した。

「鷹……か？」

「たか？」

「ああ、子供がいるみたいだな」

「……（どうしよう、やってしまった。私のせいだ）……」

子供がいたのに、親鳥を殺めてしまった。

「おい、お嬢動くな」

わたしは、渡から無理やり離れて、柵のもとへ駆け出していた。

あれから、鷹の飼い方とかで忙しくてすっかり忘れていたが、確かに狙われてたのは私だった。

神経図太く出来てんなーと今思うと感じる。

あれは、あの後どうなったんだろう…。

あんまり、考えるの止そう。

私の心の平和のためだ。

「痛い、フォボス、あげるから、突かないでっ」

赤眼のフォボスは、私から餌をほしがった。

デイモスは我関せずといった風貌だ。

鷹にも人格？いや鷹格が存在するらしい。

金眼のデイモスは、クールだ。

「お嬢さん、そろそろ屋敷に着きますよ」

「うん」

「二人は、ワシが預かっておくとするか」

「うん、お願い。適当に遊ばせといて」

「柊は、先に行っているはずですよ。表からお入り下さい」
そう言っつて、渡は車の扉を開けた。
腕を差し出す。

「ええ、わかりました」

着物の裾を寄せて、私は立ち上がった。

「いつ来ても、馬鹿でかい城のようだよ」

私は、車から降りマフィアの娘として屋敷に踏み出す。

お嬢様について その7

お嬢様が、そろそろ本宅の表玄関に参られる頃だ。

私は、腕時計で時間を確認する。

「よう、柊」

そう声をかけて来たのは、昔からの知り合いのアウルムだった。

彼の父は、金の管理を司っている7武神の一人だ。

アウルム自身、その役職を継ぐ立場にいる。

今では、補佐官として権力を誇示している。

「今日も、愛しのバンビのお迎えか？」

「はい、そろそろですので」

そう答えると呆れた顔をしてこう答えた。

「ホントにご執心だな」

「ええ、ヒノエお嬢様は、とても愛らしく可愛らしい方です」

「そのご執心なバンビの容貌は、ファミリーの中でも限られた人間しか見たことがない深窓のお嬢様、だからなあ。俺には、どこが可愛らしいのかさっぱりだな」

「当たり前です！」

別宅に困う程大事にドンはお育てになったのですから、アウルムに姿を見せるなどありません。

それを抜きにしても、この男は危険だ。

グレーの髪を靡かせて、歩くさまはエロそのもの。

巷では、色っぽいなどという言葉で括られて終了だが、この男は口が回る。

金を管理して、街の商売の幹旋やカジノの支配人だ。当たり前だが、やることが汚い。

お嬢様には、毒だ！！！

「おい、口に出してるぞ」

「とりあえず、忙しいので後にして下さい」

私は、足早にそこを後にした。

アウルムの言葉は響かなかった。

「なんで、深窓のお嬢様がここに召集されるんだろうっねえ」

「イノリ、ヒノエがここに来るって本当？」

「ええ、そう聞いてよ」

豪華な一室で2人の金髪美女がくつろいでいた。

一人は、ソファーに身を預け、爪いじりに夢中だ。波うつ金髪に、すらりとした身体。眼の色は青く、肌色は健康的。赤いワンピースを身につけ黒いヒール。ただ、組み替えた太もものスカートの中には、拳銃のフォルダーが納められている。

「ダンパパの誕生日会依頼よね」

「ええ、そう記憶しているわ」

もう一人は、長い脚を強調した黒いパンツに、ファーのついたチュニック。波打つ金髪に違いはなかったが、肩越しですっきりまとめ

られていた。

メイドが入れたお茶に口を付け、爪いじりに夢中な姉に続けざまに
う言った。

「あの子、ちょっとは身長伸びたのかしら？」

「たかが半年で伸びてたら強靱でしょ」

そう答えた美女はの瞳は切れ長で吊り上っている。
まさに、ドンの娘といった風貌をしていた。

「まあそうかも」

少しばかり、眼を細め焼き菓子を入れた。

「ミノア、あの子からかうの好きよね」

「え、だって小動物にしか見えないし」

「まあ、否定しないけど。程々にしないと従者に睨まれるよ」

「あ、柊。あいつホント邪魔」

「ふふ、まあ変わらないけど。ドーナは出席拒否だって。なんでも、
コレと旅行らし〜」

「ふーん、ダンパパ、よく怒らないね」

「さあ？」

二人は、こう見えてもまだ22歳に23歳。

「あっ、はみ出た……」

ヒノエお嬢様のお姉さま達は、マフィアの娘らしい風貌だ。

お嬢様について その8

ドンの誕生日当日

「柊、なんで私の身長は伸びないのかな？」

お嬢様は、東の国に伝わる着物を着つけながら鏡を見ていた。本日のお召し物は、黒い生地に大きな椿があしらわれている。白椿というらしい。

ドンからヒノエお嬢様へと頼まれたのだ。

ドンは、いつもヒノエお嬢様には着物を着せる。

私も従者になってから着つけを学ばされた。

東の国から職人を呼び寄せ、さらにヒノエお嬢様には何人か専門的な教師がついた。

この別宅の別棟に屋敷があり、そこで何人が雇い入れているのだ。

「よいではないですか。お嬢様にとってもお似合いです」

「そういう問題なんですか？」

「ええ、イノリさま、ミノアさまにそのような装いをしてもお似合いいにはなりません」

「ええ、まあ、否定はしないけど…、私もドン血が流れてるなら少しは伸びてもいいと思うのだけど…」

バレルファミリーのドン ダン・ハリウエル・バレル

この島の名を受け継ぎ、古くからこの土地を納めている家系だ。身長はおよそ196センチ。

深い緑の眼を宿した男で、髪の色は深い茶を宿している。

私は、赤子の頃から指で数える程度しか顔を合わせていなかった。だから、ドンと呼んでいて、父としてはあまりに認識が薄い。

（大体、あんなイケメンを父に持つなんて信じられないし。私は、母親に似てる設定なのか、自分の容姿と比べるとかなり疑うよ）

「お嬢様？」

柊は、手を止めた私を不思議に思ったのか、こちらを振り向く。

「何でもありません。柊、髪を結ってくれませんか？」

「はい、ただいま」

柊は手慣れたもので、この腰より先にある髪を手早く結びあげ始めた。

「ヒノエお嬢様、ご機嫌麗しゅう。柏木…」

「山根…」

「日下部でございます」

「先生方々、すみません。おいで頂いてありがとうございます。」

柏木・山根・日下部の3人は私の家庭教師だ。

東の国出身。

日本と似た国なのか、この国は日本語だ。

柏木は、華道・茶道・着つけなど動作などの先生だ。

山根には、武道・日本語・算術などを教わっていた。

日下部においては、三味線・舞・笛などだ。

3人とも女性という事には驚きだった。

何でも母の知り合いらしいので、遊郭の出らしい。

なので、どう見ても艶めかしいの一言に尽きる。

この人たちが、現れてから私はいいところのお嬢様の習いごとじゃんかと呆れたものだが、ドンの教育は徹底しているなあなどと他人事だった。

それと同時にイイのかマフィアなのにと思ったりもしたが、なし崩しとはこういう事を言うのだ。

その後は、かなりしんどいの一言だったが、良い機会だから頑張った。

(それなりに形になってればいいけど…はあ)

「すみません、本日はドンの誕生会に出席することになりました。つきましては、今日の課題を先送りにして頂きたいのです」

「かしこまりました」

「お気をつけて」

「私たちは、御前を失礼させて頂きます」

「お嬢様、参りましょう」

「ええ、柊」

わたしは、これでもマフィアの末娘だ。

お嬢様について その9

「アウルム、聞いたか？」

「あん？…なんだお前か」

グレーの髪が揺れ、同色の眉が上がる。
アウルムは、中庭で葉巻を吸っていた。
真っ青に晴れている空に白く煙りが立ち上がっていた。

「アルマか、何の用だ」

「何の用って、今日の会合の事さ。聞いているだろ、ドンから」

「だから、何だ」

「なんだって、ヒノエお嬢も出席らしいじゃないか」
そう少し声を荒げて答えた男は、ダークバイオレットの短い髪を揺らしていた。

ただ、彼より少し身長は低いせいだからだろうか、それとも別影響か、年齢はアウルムより少し若いように見える。

「武器屋の息子が、ごちゃちゃうるさい」

「それは、関係ないだろ！…第一、俺の仕事は船の警備だ！」

「息子に違いねーだろ」

「まあ、そうだけどな〜…」

「てめーは、まだ親父と喧嘩してんのか…、馬鹿か」

「うるさいな〜…、それより、」

「はいはい、柊が迎えに行つたよ」

「へ〜、やっぱりホントなんだなあ」

「ドンからの命令だ。欠席する訳ないだろうよ。そんなこともわかんねえのか、お前今年いくつだ？」

イライラしながら、アウルムは葉巻の火を消した。

「26」

「ふん、わかつてんなら、似合うようにしろ！」

「一つしかかわらないだろー」

口を尖らせ、両手をパンツスーツのポケットに入れる。

「年齢はな。…ああ、身長もな」

「そつちは、関係ないだろー」

「ハーンハッハッハッハッ」

そう笑って去って行った。

「ちえ〜…」

アルマ・プロセス、26歳。

武器の管理を司る父を持っているプロセス家の二男。
身長はおよそ188センチ。
兄と姉は、父の管理化のある部署で働いていたが、彼は船の警備の
部署に所属している。

「おい、アルマ、どうしたんだ？」
同僚が反対側の廊下からやってきていた。

「いや、何でもねー」

暗い廊下を一人歩いている男はつぶやく。

「はあ、何があるんだか…」
アウルム・スカルピーニ、27歳。
金を管理する部署のナンバー2。
身長およそ192センチ。

「ピ、ピーッ」

「わっ、突くな、フォボス」
2匹の鷹を連れた男が反対側から歩いてくる。
1匹は好戦的、1匹は我感觉せず。
別の気配に気付いたのか、もう一人も羽をばたつかせた。
「デイモス？」

「鷹、か…」

いい歳の男が2匹を連れている。

「え、ええ、」

「誰のもんだ」

グレーの瞳は強くなる。

「ヒノエお嬢様の物です。渡です。」

渡は、2匹を抑えてそう答えた。

「渡、お嬢様の護衛か」

「はい」

「手間を取らせた」

「いえ、失礼いたします」

「ピ、ブイーーーー」「ピ、ブイーーーー」

「二人とも、静かにしろ」

まるで、うるせいとでも言っている様だ。

2匹はお嬢様の鷹である

お嬢様について その10

グレーの髪の毛を背に2匹と1人は廊下を突き進む。

「全く、お前たちはピーピーウルせー鷹だな」

「ピ」「ビィ」

「イタッ、そう言えば、あの時もそうだったな」

「フォボス、威嚇しちゃダメ！！ドンだよ。偉い人なんだから」

「ピ、ギビィー」

羽をばたつかせて、ドンを睨みつける。

「ふふ、ダンパパ、鷹に威嚇されてるし」

「ふっ、ミノア、笑ったら失礼よ」

「はい」

2人の姉はどこ吹く風だ。
相変わらず、凄みのある美女だ。

(いいボディしてるよな)

威嚇されている当の本人は、何を考えているかよく分らなかった。
無表情。

(美丈夫の無表情は、本当に怖い。何考えてるんだろう、この人。
怒ってたりして)

「も、申し訳ありません。きちんと言い聞かせます。ドン誕生日
パーティーに呼んで頂いたのに」

わたしは、着物の裾を握り小さな緊張を強いられていた。

「かまわん。お前が主だ。それより、どうだ？」
椅子から立ち上がり、こちらへやってくる。

「どう、とは？」

「あら、キモノのことよ。ダンパパが選んだのよ。」

「そうそう、すっごーい悩んでたし。ダンパパは」

間髪入れずに話してきて、2人も私との間を詰めてきて、周りを囲む。

美女・美丈夫に囲まれて私は極度の緊張状態だった。

この親子は、普通の美女・美丈夫とは違って、妙な威圧感があるので毎回辛かった。

さすがは、マフィアのドンとその娘だ。

(助けて、柊、渡…)

従者と護衛は、扉の前で控えている。

「相変わらず、ちっさいねえ、ヒノエは
そう言つてミノアは着物に触れる。」

「そうね、容姿も幼いし、今年は17よね。何がいいかしら？」

「それより、ソレの着心地はどうだ」
イノリの話を遮つて、ドンは感想を聞きたがる。

「とてもいいです。ありがとうございます。」
カチン、カチンの私を差し置いて3人は何か揉めているようだった。
近くにいと未だ上手く話せない私は、内容を聞いていられる程余裕がない。

その頃、扉前

「おお、お嬢が完全に囲まれて何も見えん」

「口を慎みなさい、渡」

「ただどよう、かわいそうじゃないのか、アレ」

「ですが、父親ですよ。ファミリーのドンです。どうにもなりません」

「だけど、困ってるお嬢を助けんのが従者の仕事じゃないんか」

「くっ」

「あーあー、かわいそう。お嬢は超絶に緊張している」

「わかってますよ。行けばいいんですよ」

「おー、さすが柊。お嬢の一の従者」

「ピーー」「ビィー」

鷹はそんな二人を視界に入れていた。

「ですから、ダンパは威圧的なんですよ。ただでさえ無口、無表情」

「そうそう、40センチ以上も身長差あって、その顔!」

「…お前たちはうるさい。私の誕生日だ。少しは黙っている」

「あら、嫉妬?」

親子の言い合いは続く。

私の緊張も続く。

(その腰と太ももにある拳銃を握って話すのは、ヤメテ)

今日は、ヒノエお嬢様の父、マフィアのドンの内輪のお祝い日である。

お嬢様について その11（前書き）

お嬢様誕生の経緯について
小さな番外編へ

お嬢様について その11

東の国、遊郭

藤は、以前何と自分が呼ばれていたのか知らなかった。父も母も東の国では、異端と呼ばれる小さな種族だったと言つ。彼女は小さなその身に、種族の血を濃く受け継いでいた。東の国では、こう呼ばれている。

邪の血

戦乱の中その血を持つものは利用され殺され、世が一端の落ち着きを取り戻す頃には、もうすでに耐える寸前だった。

貿易が盛んな街の遊郭の最奥一室に彼女は存在していた。人買いに売られ、ここへやってきていくつもの月日が経っていた。

「藤、髪を結っておくれ」

そう彼女を呼んだのは、今仕えている蓮太夫。艶めかしい西洋薔薇をあしらった着物を身につけている。流れた黒い濡れた髪が美しかった。

「はい」

「他の奴らはどうしたの？」

「他の処へお使いに、それからお参りに出ています」

「そうかい…、お前旦那たちには知られてはいないね」

「はい、大丈夫です」

「ならいい、その力は隠しておかなくてはならない。私がこの地位を得てから探し始め見つけ出したのは、お前を含め4人」

「姉さんは、大丈夫ですか？」

「ええ、いつも通りだよ。」

「ですけど、今日はお休みになられた方が…」

「今日は、大事な盟約の日なんだよ」

「めいやく？」

「ああ、私たちの種族にとって大事なことさ」

「？」

藤は要領を得なかったが、蓮太夫は唯一信用に足る人物。

彼女が言っているのだ、そうするべきだと思った。

瞼を静かに閉じた太夫は、口を開いた。

「お前たち4人は、今日来る男に着いてお行きなさい。藤、お前は
この血を受け継ぐ者を産むんだ。もちろん、あの子たちの中にもい
ずれ成すものもいるだろう。だが、そなたが産む子は少し違う。強
き力を持ち、隠れ生きて来た我らの血とは違った人生を歩もう。こ
の一族の血は、藤、お前たちにかかっている。この地には、い
づれ閉ざされてしまう。お前の命は、もうすでに終幕に近づいてい
ると言ってもよい。子を成し、緩やかな終焉を」

蓮太夫は、先見の力を持っていた。

邪の血を引き継ぐ子には、皆皆人と違う力を持ち生まれる。

力には、個々の差は存在したが、戦乱のの世には重宝されし力だっ
た。

「姉さん…」

以前、藤には、家族がなかった。

そして希望もなかった。

それを作ったのが、蓮太夫だ。

「いいかい、守るんだ。必ずだ」

「……………」

藤は、口を開けようとするが出来ない。

扇を開き、小さく扇いで窓の外へと蓮太夫は視線を変え、重ねて藤に解いた。

「藤、…私の名はなんと知っている者はすでにいない」

「えっ」

「私は、丙（ひのえ）と呼ばれていた。もう呼ぶものはいない。覚えておいで」

「……………はい」

蓮太夫のうつすらと弧を描いた口元は、とても美しかった。

「バーン、着いたな。」

「ええ、随分掛かりました。」

港には、一際大きい船が到着し一時の賑わいを見せていた。それもそのはず、出てきた男たちは随分大きい身体をしていたのだ。

「とりあえず、交渉は終わらせて、息抜きとする」

「はい、ドン言う通りに」

藤は、この時すでに先の運命に決意を固めていた。

マフィアの娘の誕生はもう少し先の話になる。

お嬢様について その12

バレル島、ドンの私室

わたしは、その扉の前にいた。

「お嬢様、ドンがお待ちですよ」

柵はやさしく笑って私を即した。

「はい」

扉を息を殺し叩く。

「ヒノエです。しつれいします」

そう言っつて扉を開いた。

「遅い」

「す、すみません」

ドンは、椅子の上で脚を組み座っていた。

（今日は一人だ。よかったあゝ。ああ、ホント集まると恐ろしいフ
アミリーだから…）

「おいで」

「ドン、久しぶりです」

「ああ、久しいな。息災か？」

「はい」

「そうか、ならよい。……やはり心配だな……はあ」

「???…急にどうしたのですか?」

「…ああ、急な話ではないんだ。お前が生まれた時から決まっていたことだ。これはな」

「決まっていた?」

「ああ、俺が支えてやる事が出来ればいいが、私は藤と契約した人間だからな」

「母上とですか?」

「ああ」

そう呟いて頬を撫でてくれたが、いつもより元気が無いように感じる。

「ドン?」

(美形が悲しむと超々カッコいい…、憂いありまくりだ。スゲー)

「いや、会合までしばらくある、ゆっくりしているといい」

「?…ここですか?」

「ああ。少し様があってな。ここ空けるが、ゆっくりするといい」「はい」

ドンはそう言ってここを出て行った。

入れ違いに、いい紅茶の匂いと共に柊が傍にやってくる。

「ドン、行ってしまいました。柊、なんか変じゃなかった?」

「変とは?」

「うーん、なんかいつもより迫力がありませんでした」

「迫力ですか?」

「うん」

「ヒノエお嬢様の前ではいつもあまり迫力はありませんよ、ドンは」

「そうかな?」

「そうです」

何やら柊は、満足そうに笑みを浮かべて言う。
今日はどうやらいいお茶が入れたらしい。

「藤、約束は守るよ」

ヒノエお嬢様は、ドンに愛されている末娘である。

お嬢様について その13

「柎、私今嫌な予感しかしないのだけど…」

ドンが去った後、暗い表情をしたままのお嬢さまがいた。

ヒノエお嬢様の嫌な予感しかしないのだけれど発言は昔からよく当たる。

いや、外れた事がないと言ってもいいのです。

幼い頃、何度驚いたことが。

本日も随分冴えわたっているらしく、何か感じ取っているらしい。

「そうなのですか？」

「うん、何か考えている顔だった」

「ドンは、周りに気持ちを悟らせる表情はなさらない方ですので、私にはわかりかねますが…」

「……」

(どこが、あんな不自然な態度…、何かよからぬ事に決まっている！……！)

「お嬢様？」

思案顔で眉を顰めていらっしやるお嬢さまは可愛らしかったが、私は、別の事に気を向けるようにする。

「クッキーが上手く焼けたので、お一ついかがですか？」

「わぁ、おいしそうです。ありがとうございます」

「いいえ」

ヒノエお嬢様が、ずっと笑顔でいらしゃいますように、この柁、精一杯手を尽くすのみです。

きっと、ドンも同じ気持ちでいらっしやることでしょう。

その時ドンは、時間が経とうとも忘れもしない、あの瞬間を思い出していた。

ダンは、始めて東の国へ来てから緊張を強いられていた。

「生まれた!!」

「バーン様、お生まれになりました」

「おなごです!!」

3人の女子が居間へ駆け込んでくる。

2人の大男がそわそわしながら、居間を陣取っていた。

「ドン、生まれたそうです!」

「そうか、そうか…、藤が産んだか…」

190を超える男が、息をつき地に足をついた。

「……ヒノエ、母…です」

「おぎやー」

「お父様もどうぞ、こちらへ」

「あ…、あああ」

ドンこと、ダン・ハリウエル・バレルは感動していた。

彼は藤という女性に会う前、すでに別の女性と結婚して子を儲けていた。

しかし、バレルファミリーを納める男としての結婚だった。

愛した人の子を抱くの初めての事だったのだ。

「可愛いな、…それに小さい。」

「…ええ」

「よくやった、藤」

「…はい、……この子はヒノエです。そう決めて居りました通りに」

「ヒノエか」

「はい、…この子は運命の子です。私たちの力を受け継いで生まれ
てきた。私の命も後少しの期間、あなたの島に着くまで持つとよい
のですが」

「大丈夫だ。信じよう、藤」

「…はい」

藤はその時とても綺麗な顔で笑い、ドンに幸せな気持ち運び、一
抹の不安を過らせた。

しかし、彼が過去ないほどの幸福を噛みしめていた事は紛れもない事実である。

「ヒノエ、私とあなたの子」

マフィアの娘の誕生は、随分感動的に始まっていた。

お嬢様について その14 (前書き)

ドンは、まだ考え事中のようです

お嬢様について その14

あの時、藤の命を保たせたのは、俺だ。

太夫が言うことには、藤と俺が出会うのは遅かった。だから、仕方のない事なのだと言ったのだ。

蓮太夫は、変な遊女だった。

東の国の遊女は皆こんな女なのかと勘違いした程だ。

「…外人さん。」

あなたは、私の愛しい子と愛する為にここへ来たのよ。

遙か昔から我が一族は婚姻するものは生まれた時決まっっていて、先読みするものが引き合わせ一族を増やしていた。

元々、人と違う力を宿した私たちは、生殖機能が高くないの。だから、自然とその形が培われていたわ。

もちろん、そうしなったものも存在するけれど、子は生まれない事が多かったわ」

蓮太夫は、遊び女とは言っても教養の高い女性のようだった。

「そうね、私はその力を身に宿す運命に生まれてきた者よ」

「…ふん、そんな一族いるものなのか？」

「ええ、了承などいらないわ。」

あなたには、あの子たちを連れてここを出て行って貰わなくてはならないのだから」

「ほう、この私に指図するのか？」

「ここで貿易という名の商売をしに来たことは承知しているわ。そして、それが上手くいっていないことも承知している」

「……」

「だから、私がそれを上手く運ばせる助けになり、等価交換といきましょう」

「…ふん、いいだろう。女の面倒くらい見てやるさ」

俺は、どうしても成果とこの東の国から輸入したいものがあった。

その為なら、何でもよかった。

女の面倒くらいで、達成されるならそれでもよかった。

他国で大事になるよりは、その方が手つとり早かった。

「約束」

「ああ、守ろう」

「承知下さいますありがとうございます」

藤に会ったのは、それから1日後。

子供のように小さき女だったが、黒い長い髪に、静かな眼が印象的だった。

「お前と他3人の世話を任されたものだ。ダンと呼べ」

「ダンさまですか？」

…藤です。花の名の藤。そう言います。」

着物をすり寄せて、小さい身体をさらに丸めて挨拶する姿は可愛らしかった。

「ふ、じ」

「はい、異国語お上手な方で安心しました。…姉さんが、外国の方と」

「上手いか、そうか、褒めて頂いて光栄だよ」

「姉さんが、我儘を聞いて頂けたと言っておりました」

「……、ああ……、そっだ」

「…有難き事にございます。姉さんに代わり、深く深く感謝申し上げます。お世話頂けるのですから、精一杯私もお世話致します」

がらんとした遊郭の一室で、蓮太夫は静かに葉巻に火を付けた。

「その子の魂は、小さく細い。」

しかし、その子の魂の意志は何より強い。

その子の魂は、生まれるその時に違う力のある魂に入れ変わる。

その子の魂は、強くそれを望み、自らの力で力のある魂を呼ぶ。

その子の力のある魂は、我々一族の力を操り、多く血を残す。

その子の力のある魂は、違う地で正しい形で一族の繁栄をもたらす。

……こんな理不尽な一族が、大きくなるなんて面白いことだよ。

ふふ…受け継ぐ能力は、元の魂の力・私の力・藤の力、自身の力、

随分欲張りな子だよ。

全く、人生最後の方でこんなものをみるなんてね…。

藤、私には巡らなかったことを、残りの人生で人を愛して愛して幸せを味うんだよ…。」

この言の葉の予言は、誰も聞いていない

別宅の別棟のテラス

「伝えることが仕事ではない。先読みは、見ることだからね」

「柏木??」

「ああ、日下部ですか…」

「急にどうしたんですか?」

「…蓮姉さんが言ったことよ」

「懐かしいわね」

「ええ、何となく。ヒノエお嬢様は、藤に似てるけど蓮姉さんの力も宿してる気がしてねえ」

「そうですねえ…力を持って生まれた一族の娘だけれど、相手が一族同士とは全く話が異なるものねえ」

「そうよね、私たちの子は、東の国の人で力の現れなかった一族の子ですしねえ」

「ええ、ヒノエお嬢様の能力の発現は曖昧でよく分らないところがありますから…」

「…私たちもよく注意しておかなくてはね」
「ええ」

ヒノエお嬢様は、藤の忘れ形見です

お嬢様について その14 (後書き)

主人公が中々出てこないけど、今は仕方ない(- -)

お嬢様について その15 (前書き)

やっとあの日のヒロインのお話

お嬢様について その15

会合までどれくらいなのか分からない私は、あの日を思い出していた。

(今思うと曖昧な部分が多い日だな。…衝撃的な1日になっていいはずなのに、あんまり覚えてないなんておかしいし)

いつもの通り事務仕事をこなしていたと思う。

社員ではない私は、残業は出来ない。

後4時間で今日分を終わらせなければならぬ。

いつもの事だが余裕などある訳がない。

明日までの仕事が、終わらず焦っていた事を覚えている。

「金澤さん、コレなんだけど、どうやって処理したか知りたいんだけど」

(またかあ、この人本当に仕事覚ええないよな。あれで、社員なんだもんなあ)

「はあ?…何事が問題でもありましたか?」

「問題というか、コレはこれであってるのか確認したいんだけど」

「…今月で8回目だよ」

マスクの下からボソリと呟く。

あの頃よく咳やくしゃみをする上司の前にデスクがあって、私の方

が毎日マスクしていたのだ。

「それは、先月企画から発注を入力を変えて別に回して下さいと言われたものです」

「そうだったけ？」

「そうです。違うと思うなら企画や、課長に確認取って下さい。その方がよいと思います」

「い、いや、別にそれはいいんだけど」

（いいなら言わないでよ…、まあ信用されてないんだろうけど）

いつもの通り嫌みな嫌がらせで仕事は、中断を余儀なくされている。

「すみませんが、他にご用事なければ資料を届けに行きたいのですが？」

「いや、ちょっと待って、…後コッチの件の話なんですけど、…あれどこにやったけ…ちょっと探すから待って、…あれない。ここに置いたはずなのに」

（はあ、長引くな、これは。何に突っ込めばいいんだろう…）

「…帰ってきてから聞きますので、探しておいて下さい」

「待って、すぐ見つけるから。…時間は掛からないし」

「…はあ」

(もうすでに時間掛かっているのに。時間掛からないって何?…はあ、何処か別のところに行きたいよ。これから、この男の暇つぶしに付き合ってくらいなら)

『…て…な……それなら、一緒に来て』

「えっ?」

『はじめまして』

眩しい光と共にフェードアウトだ。

私は、藤という女性の中に生まれた生命。
でも、きつと生まれるまで私の生命力は持たない。
けれど、どうしても私は、彼女から生まれたかった。
その為に私は、生命力のある違う魂を求めることにした。
私の生命力が尽きて、この器に入って生きていける魂を待ち続け

た。

『はじめまして』

「え？…？…なんか声がする？」

『ええ、あなたの中にいるの』

「私の中に？」

『そう、ここはもうあなたの器じゃないの。私の器の中。…金澤内さん』

「…つまり、…私は別人になると」

『ええ、今度もヒノエとして生まれるの』

「そんな事許されるの？私の人生は？」

『ごめんなさい。でも、私はもう少しで生命が尽きる。あなたに任せたい。この血は、人とは違う力を持って生まれる。あなたは、強い生命力でこの力を扱うことのできる魂の持ち主』

「…ゴキブリ並みの生命力のくせに運は持ち合わせていなかった訳か…はあ」

彼女は落ち着いていて、何か諦めているような気配がした。

その証拠に取り乱したりすることがないからだ。

時間の取ることの出来ない私には好都合だったが、同時に違和感を覚えた。

『強く願い思いを遂げる力、先を観る力、他を癒す力、自身を回復させる力。あなたは、その身に宿して生まれる』

「へ〜、何か代償が必要なのでしょう？」

『ええ、自分の生命力よ。これを行使して力は開花するの。』

「ふーん、だから強い生命力なんだね」

『ええ、嫌がらないの？』

「来ちゃったものは仕様がなし、また人生を歩み直しするだけでしょ。それより、私みたいな人間に務まるかの方が大丈夫って感じ」

『諦めてるのね』

「そうだね、生き疲れた感じ。いつもどうにもならないから」

『……………』

彼女の記憶を封じて新しい希望ある人生を約束して

私は、最期の力でそう願っていた。

(…全然、思い浮かばない。ピカーと光って赤ん坊)

ヒノエは、以前もヒノエで、これからもやはりヒノエだ。

お嬢様について その16

(凄い人)

ヒノエは、柊に連れられて会合が行われる巨大なホールにいた。

「お嬢様、大丈夫ですか？」

「はい、少しここは空気が悪いように思いますが…」

「ヒノエじゃない」

その声に私はゆっくり振り返る。

会合は始まってからしばらくの時が経っていた。

ファミリーのほぼ全員が参加する予定になっている。

会合は普段より人数が多く、もちろん、バレルファミリーは巨大だ。他のファミリーからの監視の目もあった。

大ホールには、多くの目がチラついている。

「今から、バレルファミリーのドンであるダンから挨拶がある」

進行役からの一声が、周りの静けさを誘った。

歳を重ね凄みと威厳を増したファミリーのドンが、ホール中央に立った。

「次にバレル島を納めるものを決めたので報告しておく」

急に場から音が消えた。

「次期代表は、ヒノエ・ハリウエル・バレルとする」

一瞬の沈黙の後に大きなざわめきが起きる。

「これは決まったことだ。変更は利かない。誰が何を言おうとも次期ドンはヒノエだ」

周りに動揺が広がる。

「で、ですが、ヒノエ様はファミリーに所属してすらおりません。

幾らドンの娘と言えど…」

「そつだ、それにドンには他に優秀なご息女がいる」

「イノリ様やミノア様はどうなる」

「…第一、そんな娘がいる事すら知らないぞ」

「現ドンは何をしている」

「…しかし、ドン…」

さまざまな声上がる。

「私の妻は今恋人と旅行中だ。彼女にはドンナの地位から退いて頂くことになった。それから、ミノア」

ドンは、娘を呼ぶ。

「はい、ダンパパ」

「お前は、プロセス家へ。ドンの名においてその婚約了承しよう」

ミノアは満面の笑みで笑い、舞い上がっているようだ。

「本当！！」

「ああ、本当だ」

「ありがとうございます！」

周りの動揺とは裏腹に2人の間には穏やかな空気が漂っていた。

「…ふふ、ダンパパも思い切ったことをするわ」

相変わらず重厚なソファに身を預け、イノリは爪にマニキュア中だった。

隣には、ヒノエが固まった状態で鎮座している。
ちなみになぜか正座だ。

「イノリには、ヒノエのサポート役を頼むこととする。それと同時に今所属している部署からの移動を命ずる」

「はい、承知いたしました。ドン」

イノリは爪を弄ったまま顔を上げ返事を返す。

「ミノアは、今のバレル島警備から船の警備へ移動だ」

「はい」

「現金な子」

「いいじゃない。ふふ、一番乗り」

「ふふ、面白そうな感じがするわ。今の部署って人の暗殺ばかりでつまらなくて、重労働の割に面白みにかけるのよね。もっと頭脳戦を楽しみたいわ」

「次の報告に移る。……娘が心を射止めたものに我が娘の隣を与えよう。だが、全員と言つ訳ではない。今から名を上げる。その者たちの意見は利かない。全員参加を命ずる。期限は1年」

「……うふふ、ヒノエ、面白い事になったわね」

イノリは心底愉快そうだ。

ヒノエお嬢様は、昇華できない問題に直面していた。

お嬢様について その17

「イノリ様、私こんなところにいて宜しいのでしょうか？」

「ここは、会合が行われているホールのソファー前

私は、イノリ様に声をかけられてからここいた。

「…ヒノエ、違うでしょ！」

「イノリ姉さん、でも、目立ちますしっ…」

「平気よ、私が隣にいるんだから、嫌なら消してあげようか？」

「い、いいです。間に合ってます」

「そーおお、こんな人ばかりで、少しは減らしても問題ないでしょ」

「減らしたら、困ります」

「…誰が、困るのかしら」

「私からです」

「ヒノエが？」

「はい」

「…ふふ」

「イノリ姉さん？」

二人は、よく噛み合っていない話を展開させていた。

ホントに面白い子。

私が、ヒノエにあったのは随分前の話だ。

私は、毎日退屈していた。
もうすでに私を教育していた母には、父とは別に恋人がいた。
二人とも仲がよくないことはよくわかっていた。

母は別のファミリー出身者。

祖母祖父に言いくるめられてここに嫁いで来たのだと散々語った拳
句、私とミノアを乳母に任せ遊び歩いていた。

母と呼ばれるようなことをしてくれた記憶などない。

父は、私にこう言った。

「俺は、お前たちの母を愛することが出来なかった。すまない。だ
が、お前たちは私の娘だ」

なんてバカな人だとも思ったが、母とは違い嫌な気持ちにはならな
かった。

後から知ったことだが、母は女兒でなく男児を望んでいたこと。

それは、母の両親も望んでいたことだった。

しかし、私もミノアも女兒。

父は、何とも思っていなかったらしいが、母は毎日イライラしてい
た。

発散させるが如く外へ遊び回っていたらしいことを私は知っている。

あれは、私が6歳にミノアが5歳になった頃の話だ。

「別邸に女を囲っているそうですね」

「ああ、だからなんだ」

「私に対する嫌みですか？」

「そのようなこと、思っている筈もない。私は、彼女に惚れたから妻にただけだ」

「そうですか、どうぞご自由になさって下さい。わたしは、ドンナとしてこの地位にいるだけです。実家になど帰るつもりもございません」

「かまわない。妻はすべて知っている」

あの2人が、顔を合わせている事を聞きつけ珍しく思い盗み聞きした。

その時聞いた衝撃的な事実に驚いた事を覚えている。

その後どうやって別宅に向かったのかは覚えていないが、島の奥の屋敷の前にいた。

笑い声と赤子の声が屋敷の庭から響いている。

「ヒノエが笑った」

「あっああ」

小さな女の人と赤子だった。

2人とも黒い髪黒い眼、違う国の人間だった。

「…あら、可愛いお嬢さん。どうしてこんなところに？」

「……」

「…あなた、イノリちゃん？」

私は、コクリと喉を鳴らした。

「私は、藤と申します。この子はヒノエ。…通じているかしら？」
拙い言葉だったが、やさしい笑顔だった。

「イノリよ。はじめまして」

「あなたの妹になるの、嫌でなければ可愛がって下さい」

「…いいの？」

「…ええ、わたしはあなたの本物の母ではないけど、家族になれる
といいわ」

それから、あの屋敷に通うに様になってすぐ父にも見つかった。けれど、あの時から何となく家族の意味がわかった気がしている。確かにあの瞬間から、藤は私の家族だった。母の代わりだったのかもしれない。

2年にも満たない短い幸福だったように思う。

あの屋敷自体揺り籠のように暖かい場所だったせいだ。

藤がいなくなった後、私たち姉妹を再教育すると現れたドンナがくるまでは…。

母を哀れには思ったことはあれど憎む事はできなかった。

寂しい人だ。

「イノリ、ミノア、ヒノエの事を頼んだわ。可愛がってあげて。あなた達に会えて幸福だったわ」

藤が私に言った最期の言葉だった。

「イノリ姉さん？」

「何でもないわ。…ヒノエ何か嫌な予感がするらしいわね。今日」

「…なんでそれを御存じなのですか？」

「…私が知らないことなんてなくてよ」

「……そうなのですか？」

「ええ、私はこう見えても暗殺部隊の隊長ですもの」

「…あ、隊長ですか…そうですね」

「ええ、そうなのよ」

ヒノエは下駄を脱ぎ、ソファの上で正座をする。

「よく痛くないわね、その姿勢」

「この方が落ち着きます」

「…ふふ」

(何に突っ込みを入れたらいいのかあああ)

ヒノエお嬢様の姉イノリは、暗殺を得意としている。

お嬢様について その18

(いったい、私の現在の父は何を言ったのか、さっぱり理解不明だ)

「お嬢様、大丈夫ですか？」

隣の柵が何か言っているが、あまり頭に浸透して来なかった。

「あら？…随分驚いてるのね。私は面白くて笑いが止まらないのに
もう、すでにイノリ姉の話は置いておくことにする。」

(私が、マフィアのボス……、あ、ありえないっ！！それだけならいざ知らず、夫も決められているなんて……、私マフィアは無理
……)

「…では、続ける」
こづしている間にもドンはどんどん話を進めている。

(止めなくちゃ！…それ以上聞きたくない。私の平穏が崩される！)

「御待ち下さい」

ザワザワしていたホール内がもう一度音を消しさる。

「ドン、私はこのファミリーの頭として立つ力があるものではありません。すぐに、このお話はなかった事にして頂きとうございます」

この島やこのバレルファミリーが治めるすべての人間より小さい女性性が、ドンの前に進み出た。

変わった衣服を着ている姿は、目を引いた。

また、彼女は強い眼を宿していた。

だからだろうか、誰も何も声を発しない。

強いものが宿すオーラのような物を発しているからだ。

マフィアは、身体的に強いものだけができる職業ではない。

そして、バレルファミリーのドンと対等に話そうなどと思うものも、この中には殆ど存在しない。

「いいや、ヒノエ、お前がこの島の頭だ」

「ですが、何もこのファミリーについては存じあげません。…店を運営するならいざ知らず、ファミリーともなれば大きな企業体系、そして何より、私はマフィアを存じ上げません」

「知っているではないか。お前は、私をイノリをミノアを柀をずっと幼きころから」

「それは、家族だから!」

「ああ、ファミリーは家族だ。家族を知っているお前になら、このバレル任せる事が出来ると思ってる」

「ドンー！」

「お前は、このファミリーを知ればよい。家族を知ればよい。…そしてこのファミリーの上に立て」

「……どうなっても知りませんよ」

「構わない。お前はいつでも正しき道へ行く。その為に我らがいるのだからな」

「そうよ、ヒノエ。この私が補佐なのよ」

「そーだよ、イノリ姉の泥船に乗ってるんだし、これ以上沈まないって」

「ミノア…それはどういう事？」

「…」

「全く…まあいいわ。あんたはササと嫁ぎなさい」

「はい」

「……はあ」

「ヒノエ、異論は受け付けん。質問はないな」

「待つてよ、ダンパ。それより、私の話が先!!」

「ミノア!」

「いいじゃない、ねえ、ヒノエ」

「…ふう、仕方ない。…皆よく聞け。ミノアはプロセスの嫡男の許へ嫁ぐ事になる」

周りから祝福の拍手が起こる。

「プロセスはいるか?」

「ここに」

ガタイのいい男が現れる。

筋肉質で如何にも海の男と言った風貌だ。

「お前の息子に娘を預ける」

「確かにお受け致しました。ミノア様を迎えられること大変嬉しく思っております」

「ふう、3人の中で一番乗り」

ヒノエお嬢様の姉ミノア様は、東の国ではこう言う「じゃじゃ馬娘」

お嬢様について その19

周りのやかましい様子をほって、ドンはさらに続ける。

「とりあえず、報告を続ける。名が挙がったものは強制参加とする
アウルム・スカルピーニ
ルイージ・ライネス
アルム・プロセス
ヴィート・オルコ
ホエル・バンデラス
キケ・デ・アンダ
ビダル・ベルグラノー
ニコロ・アンバシャトーレ
イサーク・バロツコ
ガスパール・ムロ
ラウール・パス
ドナルド・プガ
最後に、従者
以上13名」

（誰ソレ！？…柊もですか！？）

ヒノエは、カタカナだらけの名前に反応出来ずにいた。
元々日本人だ。

彼女に外国名の羅列は敵しかった。
能面の様に完全に顔から色が消えていた。

娘の表情がなくなっていく所をドンやイノリは確認していた。

「もう一度言う、期限は1年だ。そして、1年後ヒノエをドンナとする。その間は、私の直属とする、以上だ」

そう発した後、ドンはそのまま会場を後にした。

「イノリ姉さん、一つ質問があります」

「ええ、何？」

「なぜミノア姉さんは、武器管理の部署ではなく、船の警備の部署なのですか？」

「…ああ、それはね」

イノリ姉さんが、マニキュアを置いた時だった。

「その件、私が説明したしましょう」

長身の灰色の男が現れる。

「？」

「初めてお目にかかります。アウルム・スカルピーニ、金の管理の部署に所属しています。終とは幼き頃からの付き合いになります」
手の甲に口づけをした。

無駄にフェロモン垂れ流し男だなど思いながら、質問の返答を待った。

「武器の管理は、武器を製造・輸入出・開発を仕事としている。そして、この仕事は基本運ぶ手段として船を使用しているのです。だから、ドンは娘を船の警備に移動させたのでしょうか」

無駄な微笑に裏がある気がして、それ以上の追言を辞めることにした。

（やっぱり、これ程大きくなると、マフィアと言えど企業の要領で

全体が形成されているのか、もしくは小さな村の運営の様になっているという事になる。…でも企業にも村や町の運営にも暗殺なんてないし、無理…)

「そう、ありがとう」

「いいえ、お役に立てて光栄です」

胡散臭い笑顔だった。

私は、イノリ姉さんと静かにホールを退出する。

見計らったが如く、後ろに待機していた柊は声を荒らげた。

「アウルム!!」

「柊か、なんだ…」

「なんだではありません。お嬢様にあのような事をするなんて…お嬢様にキスなんて…」

「たかが挨拶だろ。第一お嬢さんの俺を見る眼、無表情で可愛げもない」

「あんなに可愛らしい人はおりません！相手があなただからです」

「はいはい、別にいいだろ。期限は1年。俺たちは強制参加なんだからな」

「……………くっ、死になさい」

銃を発射させる音が響く。

ホールのざわめきとは全く別な空気を流し続けているものもいる。
ミノアとプロセスだ。

「今日はランは来てないの？」

「ええ、仕事がありましたから」

「そうなの、残念ね」

「そうですね、では迎えにでも参りますか？」

「そうするわ。…そう言えば、まだアルムは家出中？」

「ええ、全く仕方ない息子です」

ドンの執務室

「バーン」

「何か問題でもありましたか、ドン」

「ヒノエが、冷たい眼で俺を見ていた」

「はあ、そうですね」

「…仕方ないだろう、なあ藤」

ドンは結構落ち込んでいる。

「ドン、きつと落ち込んでてよ」

イノリ姉は、そう私に呟いたが、それどころではなかった。

ヒノエお嬢様は今後の事で頭がいっぱいだった。

お嬢様について その20

本宅を抜け出して玄関前へと脚を進めていた。

「渡、車を出して頂いて構わない？」

「はい、ただいま」

「イノリ姉さん、申し訳ないのだけど、先ほどの事落ち着いて整理したいの」

「ええ、いいわよ。…そう言うところ好きよ。嘆いたり喚いたりしないで、先の事よく考えてるとこ」

「煽てても何もでませんから」

「ふふ、じゃあ移動中も話しを進めるとしますか？…ドンナ」

「イノリ姉さん！！」

「はいはい…」

軽い口を叩いていたイノリ様の瞳の色が変わる。

「まずは、このファミリーの概要からからかしらね
ドンには私たちの父。

そしてその下に今は直属の部下が存在している。

簡単に言うと、柊や私たちの周りの世話をしている従者や護衛こと。

そして、組織を動かす部署は主に7つ。

金管理部署・島警備部署・船警備部署・武器管理部署・暗殺部署・
外交担当部署・内部監査を担当部署

大体、私たちの中では、頭を取って短く呼んでいるの。

金・島・船・武器・暗殺・外交・内部と言うことになるわね。

細かい仕事内容は、また別にしておきましょう。

まず、あなたの直接の問題になるドンが名を上げたものについて、
私ができる事を答える事にしましょう」

私たちは、車に乗り込み別宅へ向かう途中だった。

「ヒノエお嬢様、後ろに一台の車が付いて来ている様ですが」
渡から声がかかる。

「そのようね、島の最奥は反対は岸壁、陸路でここを通るはドンの
関係者くらい」

「イノリ姉さん、あからさま過ぎませんか？」

（なんだか見覚えがあった）

「ええ、そうね」

イノリ姉様は、太もものフォルダーから物を取り出す。

（どっかで、あのエンブレム…）

「…、渡、止めて」

目配せをして、渡には合図を送る。

「は、はい、確かに！」

静かに車を下車する。

10メートル先の車も止まる。

「ヒノエ！」

イノリ姉は、慌てて声を上げた。

（いつだったか…、確か…渡がいて…）

あれは、私がどうしても一番大きい幹の上に登ってみたくなった日
のことだった。

まだ、外で遊び足りなくて渡を引き連れて丁度一番上まで登りきつ
た時の話だ。

「渡」

「なんだ、ヒノエ嬢？」

「アレ何？」

別宅前に停車した車を木の上から眺めていた。

「…さあ？」

午後から習いごとはなしになった私は、渡と木登りをしていた。

黒い車には、薔薇の蔓の様なエンブレムが飾られていた。
中から黒服の男が数名現れる。

「お嬢静かに」

「う、うん」

黒服の男以外に車からもう一人下車しているところだ。

「旦那様、こちらには姿が見当たりません」

「そうか、いるかと思ったが当てが外れたか？」

「早々に退散しませんと、後から監視が……」

「かまわん、来たら来たで適当にごまかして置け、行くぞ」

「は」

黒服が屋敷の周りから車へ乗車しはじめる。

木の真下に来た時、無線での連絡が入ったようだ。

丁度、専用の音が聞こえてきた。

「ガロン様、いらしゃいますか？」

「ああ、私だ」

「そろそろ時間です、お戻りになられませんか……」

「ああ、わかつた」

車のドアが閉まりそれ以上やり取りを聞くことが出来なかった。

「ガロンって何？」

「…ガロンはガロン島を中心としているマフィアの1つです。昔は力があつたようですが、最近は形を潜めているはず。なぜ、そんな奴らがここに侵入して来ているのか？」

「ふーん、…渡、木の上でよかつたね」

「本当です。ヒノエお嬢のわんぱくぶりで助かりました。いくらワシでもあんないっぱいだとただではすまんしなあ〜」

「女の人の声だったね。…なんか聞き覚えがあつた」

「そうですかい？」

「うん」

止まった車からは誰も下車して来ない。

何となく確信していた。

「何のご用事ですか？……ガロン様」

随分私って記憶力よかったんだなって自分に感心する余裕も存在していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9203z/>

有り得ない世界にわたし

2012年1月9日20時46分発行